３月の普及活動状況

～県下 10 農林事務所農業普及課と農業経営課技術支援担当の取組～

岐阜県農政部農業経営課

＝目　　次＝

ダイジェスト版・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１

各農林事務所農業普及課

岐阜農林事務所農業普及課・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４
西濃農林事務所農業普及課・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６
揖斐農林事務所農業普及課・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８
中濃農林事務所農業普及課・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０
郡上農林事務所農業普及課・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２
可茂農林事務所農業普及課・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４
東濃農林事務所農業普及課・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１６
恵那農林事務所農業普及課・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１８
下呂農林事務所農業普及課・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２０
飛騨農林事務所農業普及課・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２２

農業経営課技術支援担当

農業経営課技術支援担当・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２４

＜３月普及活動状況ダイジェスト版＞

新たな産地づくりの推進　～活力ある新産地づくり～

岐阜農林　■アスパラガス　栽培技術の向上を目指して

【現地確認の様子】

「岐阜地域のアスパラガス産地拡大」の一環として，アスパラガス栽培を学ぶ「アスパラ塾（主催JAぎふ）」の第４回目を２月２８日、第５回目を３月１５日に開催した。

第４回では、農業普及課から「保温から春芽収穫まで」をテーマとして、一連の作業内容を指導すると伴に、現地で春芽の萌芽状況等を確認した。

最終回となる第５回では、「立茎から摘心整枝・病害虫防除」をテーマに開催し出荷調整までのポイントについて指導した。

最後にアスパラガス栽培アンケートを実施した結果、１０名中７名が栽培すると回答するなど、「アスパラ塾」の実施で、面積拡大につながる成果が得られた。

揖斐農林　■アスパラガス　新組織「揖斐アスパラガス部会」の発足

３月２１日にアスパラガスの組織化検討会を開催した。生産者８名、ＪＡ２名、農林２名が出席し、組織の名称・規約・役員等を協議した結果、同日付けで新組織「揖斐アスパラガス部会」が発足した。

また、「活力ある新産地づくり支援事業」の平成２４年度計画として、高温対策と低コスト栽培の実証ほの設置・先進地視察研修会・新規栽培者の掘り起こし等の取り組みについて説明し、了承された。農業普及課では、今後、この組織を核にしてアスパラガスの生産振興を図っていく。

恵那農林　■くり　超特選栗レベルのクリ　出荷量150tを目指します！

【第６回チーム会議の状況】

東美濃クリ産地の拡大を図るため、クリ栽培の関係機関で取り組んでいる「東美濃‘クリ地産地消（商）拡大’プロジェクト」の第６回チーム会議を開催した。

会議では、平成 19 年度に策定した「東美濃クリ地産地消（商）拡大計画」の取り組みを評価し、これから５年間の進むべき方向を定めた。

現行計画では「多くの菓子業者から求められる東美濃クリ産地に！」を目指すべき産地の姿を掲げ、平成 23 年度末に超特選栗レベルのクリの栽培面積 100ha を目標に新規参入を促してきた。栽培面積は 96ha となり、目標をほぼ達成することができた。目標を達成できた要因には、プロジェクト活動を通じクリ栽培に関係する機関が一丸となり進めてきたことがあげられる。

これからの５年間も、プロジェクト活動を通じ新規参入者の拡大を図りつつ、今までの新規参入者の出荷量確保に向けた取組を行っていくことで関係機関の合意を得、次期計画では、平成 28 年度に「ＪＡ共販による超特選栗レベルのクリの出荷量 150t」を目標に取り組んで行くこととした。

下呂農林　■龍の瞳　第２回下呂地域産地戦略会議の開催

【第２回産地戦略会議】

2 月 29 日に第２回下呂地域産地戦略会議を下呂総合庁舎で開催した。下呂地域では、「活力ある新産地づくり支援事業」として「龍の瞳」による地域づくりを目指しており、戦略会議はその企画を担う重要な組織と位置付けられている。会議には、(資)龍の瞳、市、ＪＡ担当者の戦略会議のメンバーが出席し、今年度の活動成果並びに来年度に向けた取り組みについて検討を行った。

23 年産「龍の瞳」の集荷量は昨年の 1.5 倍で、販売も順調であるが、県下各地域へ生産が広がっているため、品質のばらつきに課題を残した。24 年は、更に作付面積も増加する見込みであるため、品質のばらつきの解消を検討して行く。この

ため(資)龍の瞳では、人数の多い県内の地域組合を分割して、現在の 18 組合から 24 組合とし、生産者とよりきめ細やかな連携を取れる体制を整えていく。
　農業普及課としては、関係機関との連携を密にとりながら下呂市内の８つの「龍の瞳生産組合」の活動支援を中心に行っていく。

主要農産物の生産振興　～売れる農産物づくりと産地の強化～

中濃農林　■農産物加工　自慢の加工品を持ち寄り情報交換会

　武儀地区農業婦人クラブ連絡協議会では、クラブ員が手がけている料理や加工品を囲んで情報交換会を開催した。
　おはぎ、キウイフルーツ大福、ちらし寿司、落花生の煮物、黒からあげ、つるむらさきパン、ゆずドレッシングサラダなどがテーブルに並び、試食して評価し合った。
　農業普及課では、今後も地域の農産物を使った料理の伝承や商品化を支援していく。

【自慢の加工品を紹介】

郡上農林　■山菜　山菜講習会

　３月23、26日に大和町で山菜の講習会が開催された。
　４月からの山菜販売シーズンを前に２日間で約１２０名の参加があり、販売に当たっての注意事項を確認した。
　講習会は、農業普及課が講師となって、山菜収穫のポイント、山菜と間違えやすい植物との見分け方､異物混入防止方法などを説明した。

【山菜講習会】

西濃農林　■トマト　栄養診断の実施

　農業普及課では、リン酸、カリの栄養診断の測定方法を修正し、時間と経費を削減することに成功した。ある程度の傾向も判明したが、次年度は基準値作成やリン酸吸収を高める技術確立に向けて部会と研究を進める。

【環境測定装置】

飛騨農林　■飛騨トマト　平成 24 年度の栽培始まる！

　今月から、早い農家ではトマトの播種が始まっており、育苗センターでの苗づくりも始まった。現在の所、寒さの影響も無く、良い品質の苗ができており、順調なスタートが切れたと言える。
　今年は、新品種の大幅導入や、作型の見直し（後期作型への移行）など､これまでとは違う産地の動きが見られる｡農業普及課としても、そうした動きに対応できるよう、新品種の栽培特性把握などに努め、昨年目標として掲げた「単収１ｔ増加」を目指していきたい。

【播種された育苗箱】

地域の動き等　～魅力ある農村づくり～

可茂農林　「白川町集落営農組合連絡協議会」大豆栽培研修会

　白川町で栽培されている大豆品種の莢先熟（青立ち）対策のため、農業普及課では、品種試験等を実施し、高品質・安定生産に向けた支援をしている。２月２１日には白川町集落営農組合連絡協議会の主催により、標記研修会が開催され、ＪＡからは、本年度産大豆の生産・出荷実績、来年度産の栽培計画等について説明があった。農業普及課からは、来年度の大豆生産の方向性をはじめ、青立ちを回避する栽培管理や、品種・加工適性等に関する検証等を提案し、関係者の意識統一を図った。

【研修会の様子（農業技センターからの説明）】

～農林事務所農業普及課、農業経営課技術支援担当の取組～

岐阜農林事務所の普及活動状況

平成２４年３月２１日現在

今月の重点活動

～栽培技術の向上を目指して～（アスパラ塾を開催）

【現地確認の様子】

「岐阜地域のアスパラガス産地拡大」の一環として，アスパラガス栽培を学ぶ「アスパラ塾（主催JAぎふ）」の第４回目を２月２８日、第５回目を３月１５日に開催した。

第４回では、農業普及課から「保温から春芽収穫まで」をテーマとして、一連の作業内容を指導すると伴に、現地で春芽の萌芽状況等を確認した。

最終回となる第５回では、「立茎から摘心整枝・病害虫防除」をテーマに開催し、出荷調整までのポイントについて指導した。

最後にアスパラガス栽培アンケートを実施した結果、１０名中７名が栽培すると回答するなど、「アスパラ塾」の実施で、面積拡大につながる成果が得られた。

～挑戦しようアスパラ栽培～（アスパラガス導入説明会）

【説明会の様子】

３月１日にＪＡぎふ及び農業普及課が、羽島市在住のアスパラガス栽培に興味がある方々を対象に新規栽培説明会を開催した。足近、小熊、正木、上中、下中、竹鼻の各地域から関係機関合わせて２６人が参加した。

説明会では、農業普及課から、アスパラガスのハウス立茎長期どり栽培のメリット、基礎的栽培技術、栽培開始に必要な資金等、様々な事項について説明し、栽培開始を呼びかけた。参加者からは、ハウス栽培の管理や出荷先、必要経費等について質問が相次ぎ、有意義な研修会となった。

今後は参加者に向けて、平成２４年度の「アスパラ塾」への参加を呼びかける。研修会の結果、栽培開始に前向きとなった方が多く、「アスパラ塾」への参加、面積拡大が大いに期待できる。

～岐阜市園芸振興会ＧＡＰ運営委員会開催～

【ＧＡＰ運営委員会】

平成２２年度から岐阜市園芸振興会の枝豆、大根、ほうれんそうの部会が合同でＧＡＰへの取り組みを開始している中、本年度は、部会員の作業場点検を実施した。（１４９戸／２６１戸）

また、本年度からは、いちご部会も参加するなど、ＧＡＰの取り組みは拡がっている。農業普及課では、取組に係る支援を行っている。

主要農作物の生産振興

■麦　**麦の追肥指導**

低温が続いていたことから葉色はやや高く維持していたが、３月に入り徐々に茎立が始まってきており、生産者へ追肥作業を行うよう、講習会等で周知を行った。

なお、羽島・本巣地域を中心に小麦の縞萎縮病が目立つようになってきた。農業経営課では、発生状況の把握及び、収量等の影響調査を行う予定としている。

■かき　**生育状況**

今年度は２月以降の寒さが厳しい影響で、まだ発芽期を迎えておらず、生育的には平年より遅れる見込みである。現地では、せん定作業が終了し、粗皮削りが盛んにおこなわれている。

各地で間伐検査を実施！（間伐指標の作成）

品質向上を目指して間伐徹底を呼びかけ、各地で間伐検査を実施している。
岐阜市では、3月8日～22日まで実施した。瑞穂市では、前年度の間伐検査不合格生産者を対象として2月22日に実施し、前年度の集計とあわせて間伐達成率が88％となった。本巣市真正地区では、2月18日に実施するとともに、間伐検査不合格者へ間伐指導を行った結果、約70％の間伐達成率となった。今後さらに間伐指導を進める予定である。

農業普及課では、間伐実施の目安となる指標を今年度中に作成し、次年度の指導に備える。

■いちじく　**「ぎふクリーン農業」に向けて！**

真正いちじく振興会では、2月23日に研修会を開催し、新年度に向けた栽培についての研修を行った。研修会では、近年、おんさい広場（真正）への会員外のいちじく出荷者が増える中、振興会としての付加価値をつけ、消費者へのＰＲを図るため、「ぎふクリーン農業」への登録を進めることとなった。農業普及課では、ぎふクリーン農業への取組を支援していく。

■いちご　**いちご中間検討会で後半戦に向けて**

本年は、低温及び日照不足で収量がとれていない。春の高温期の過熟果による単価下落を防ぐ必要がある。このような中、農業普及課では、各生産部会で開催された中間検討会で今年前半戦の反省と今後の適期収穫、栽培管理について指導を行った。
※　前半成績（前年対比）：収量８０％、単価１１９％

ぎふいちご加工品開発進む（農商工連携、６次産業化）

いちご加工品の今年産の主力商品となる、いちごパウダーの生産が始まった。

いちごパウダーの生産は、収穫量の増加に伴い発生する過熟果をパウダーに加工して付加価値をつけ、過熟果の単価下落を防ぐ目的で始めた。農業普及課では、生産部会、ＪＡぎふ、業者のスコラボ社と協議して仕組みをつくり、３月１５日から荷受けを始めた。

また、そのパウダーを使った新商品「信長の赤」（岐阜市鶉(株)長良園）が、今月から首都圏を中心に販促を開始した。この商品は、濃姫いちごパウダーを使った焼き菓子で、長良園の看板商品として販売を開始した。

担い手の育成・確保

■集落営農組織・営農組合

（能郷白山の郷ｼｽﾃﾑ研究委員会で集落営農設立）

３月９日の委員会で能郷地区の農業者及び小川サポーターが集落営農を設立することで合意した。

また、来年度の事業で集落営農支援派遣員（小川氏の予定）を活用して組織設立し、新規作物導入等の検討を行っていく方向となり、農業経営課では、今後も活動に係る支援を行っていく。

西濃農林事務所農業普及課の普及活動状況

平成 24 年３月 31 日現在

今月の重点活動

■活力ある新産地づくり支援事業（ブロッコリー）

出荷、生育状況

２月末までの出荷量は 23,517 ケース(前年比 110%)、販売額 30,145 千円(前年比 110%）であった。気温の上昇と降雨により花らいの肥大が進み、出荷数量が増加した。

安八地域は、３月 14 日に出荷が終了した。大垣市では、晩生品種「メガドーム」が当初計画より約１ヶ月以上遅れて３月８日から出荷が始まり、21 日に終了した。

不破地域の出荷が続いているが、ＪＡにしみのでは水稲の準備もあるため、３月末までに集荷業務を終了したいと考えている。

主要農作物の生産振興

■小麦

生育状況

３月の第１半旬に降雨があったが、穂肥の施用は２月下旬から３月中旬までに概ね終了した。

イワイノダイチは、２月上中旬に最高分けつ期を迎え、茎数減少期に入っている。幼穂長は６～８mm（3/15現在）である。農林６１号は、３月上旬に最高分けつ期に入り、現在は茎数減少期に入っている。幼穂長は３～５mm（同）である。３月に入り、農林６１号で縞萎縮病の病徴が目立ってきた。農業普及課では、症状が激しいところで穂肥の分施や追加を指導している。

【穂肥散布状況（安八町）】

■トマト

栄養診断の実施

農業普及課では、リン酸、カリの栄養診断の測定方法を修正し、時間と経費を削減することに成功した。ある程度の傾向も判明したが、次年度は基準値作成やリン酸吸収を高める技術確立に向けて部会と研究を進める。

環境制御の取り組み

トマトの環境制御に関心のある生産者が、環境測定装置をメーカーよりレンタルし、自分のハウスの状況（温度、湿度、CO_2、照度等）を把握している。また、CO_2発生装置を購入したり、再稼働（修理含）させる生産者が増えつつある。

【環境測定装置】

■きゅうり

黄化えそ病対策チーム活動

３月８日に、黄化えそ病対策検討会（参加者：県農業経営課、農業技術センター、病害虫防除所、西濃農林事務所）が開催され、現地調査とこれまでの活動実績、今後の活動の検討を行った。今後の半促成栽培の発生状況調査や栽培終了後のミナミキイロアザミウマの野外行動の調査等を行っていく。

■いちご

出荷量少ない

低温や日照不足の影響などから２番果の出荷量は少ない（３月上旬で、旬計前年比 56%、累計 77%)。３月に入ってからも日照時間が少ない日が多く、生育や着色が進んできていない。

３番果房はハウスにより進度が大きく異なるが、濃姫では収穫が始まっている。ハダニ類やアザミウマ類などの発生が見られ、農業普及課では、早期防除の実施を指導している。

■甘長ピーマン

栽培研修会の開催

３月９日に､海津甘長ピーマン部会の栽培研修会を開催した｡定植が始まっているため、定植作業の注意点や、農薬の安全使用についての指導を行うとともに、土着天敵を温存したローテーション防除や小麦のリビングマルチの提案を行った。

■アスパラガス

春芽の収穫開始

現在、春芽の収穫が始まっている。前年、葉枯れ症状の出たハウスでも順調に萌芽が出ているが、部分的に株疲れ症状が見られるので、農業普及課では、症状が広がってくるようなら立茎の準備をするよう指導した。

■なし

24 年産に向けた栽培支援

３月以降気温の上昇により芽が動き始めた。ハウスなし栽培ほ場では、昨年より３日程遅れて出蕾し、豊水の開花が始まった。栽培研修会(2／27、3／6)では、春先の天候不順を念頭におき、計画的な栽培管理を行うよう引き続き呼びかけている。　（右写真）ハウス豊水の開花（3/7 撮影）

【ハウス豊水の開花(3/7撮影)】

担い手の育成・確保

■西南濃４Ｈクラブ連絡協議会

総会に向けて役員会

３月８日に役員会を開催し、総会に向けた役員改選、次年度の活動計画を検討した。現在、当クラブは、海津市４Ｈクラブ員だけで運営しているので、他市町の 20 代の農業者に加入を呼びかけることにした。

地域の動き等

■農産物直売所

農産物直売所の新規会員確保に向けて

ファーマーズマーケットの会員を増やすために、ＪＡにしみのが広報誌で呼びかけたところ、200 人以上の応募があり、３月 14 日、22 日、23 日の３回に分けて、大垣営農経済センターにおいて、野菜栽培講習会が開催された。農業普及課は出席者から出された質問に答える等の支援を行った。

■その他

鳥獣害対策

３月 21 日に海津市有害鳥獣害防止対策協議会が､獣害被害状況を集落ごとに調査した結果を報告すると伴に、次年度の獣害対策の聞き取りを行った。

３月 28 日には関ヶ原町で、鳥獣被害防止対策に係る関ケ原町民への研修会が開催され､県獣害対策監から、「獣害対策には集落ぐるみの活動が必要」等の説明があった。

なお、猿の行動を把握するため、電波発信機を付けた猿の追跡を県の委託を受けた業者と行っているが、わな檻の仕掛けを壊す被害も出ており、住民への理解を進めることが大切である。

【捕獲できたが、逃がされた猿】

揖斐農林事務所農業普及課の普及活動状況

平成２４年３月３０日現在

今月の重点活動

■アスパラガス

新組織「揖斐アスパラガス部会」の発足

３月２１日にアスパラガスの組織化検討会を開催した。生産者８名、ＪＡ２名、農林２名が出席し、組織の名称・規約・役員等を協議した結果、同日付けで新組織「揖斐アスパラガス部会」が発足した。

また、「活力ある新産地づくり支援事業」の平成２４年度計画として、高温対策と低コスト栽培の実証ほの設置・先進地視察研修会・新規栽培者の掘り起こし等の取り組みについて説明し、了承された。農業普及課では、今後、この組織を核にしてアスパラガスの生産振興を図っていく。

主要農作物の生産振興

■小麦・大麦

新品種の現地適応性について調査

農業普及課では、奨励品種決定現地調査として大野町と池田町にて「きぬあかり」「さとのそら」の展示ほを設置している。「イワイノダイチ」に比べて、「きぬあかり」は節間伸長が早く茎数が少ない。「さとのそら」は、節間伸長が遅く茎数が多い傾向にある。

また、揖斐川町では、大麦「さやかぜ」「カシマゴール」の奨励品種決定現地調査ほを２ヶ所設置している。「カシマゴール」、「さやかぜ」、「ミノリムギ」の順に生育は早い。今後、高タンパクで麦茶に適した大麦生産を目指した肥料試験区を設置し、地域適応性を把握する。

【主茎の幼穂の状況(3/14)左からカシマゴール、さやかぜ、ミノリムギ】

■柿

現地研修会を開催、秀品率向上をめざす

３月１６日に大野町瀬古地区の柿生産者（１１名）による現地研修会が行われため支援した。当地区では昨年、炭そ病、落葉病等の病害が発生し、品質低下の要因となったため、防除暦に準じた薬剤防除を徹底し、秀品率が向上するよう各生産者の意識向上を支援した。

かき生産者大会で意識統一

３月２４日に平成２３年度大野町かき生産者大会が大野町総合町民センターで行われ、振興会員約４００人が参加した。

優良出荷者表彰及び柿の振興・拡大に向けた記念講演が行われた。農業普及課では、農業技術センター及び農業経営課とともに平成２４年産柿の品質向上をめざし生産者の意識向上を図った。

■茶

一番茶に向けた栽培管理講習と GAP の推進

管内各茶生産組合において総会、これを機とした栽培講習会が行われている。農業普及

課では、病害虫防除対策や、農薬・肥料の適正使用、土壌診断に基づいた土壌改善など、生育期間中に行った現地試験結果などから情報を提供し、適正管理に向けた啓発を行っている。

また、岐阜県 GAP 導入マニュアルによる自己点検を行い、生産工程管理の必要性について意識啓発を行った。

今冬は、２月に入ってからの降雪、彼岸すぎの寒の戻りが厳しかったものの、芽の動きは早く、生産者は、生育に合わせた栽培管理に追われている。

■フランネルフラワー

切花フランネル現地検討を実施

３月１３日に花き担当普及員および関係者による生産指導検討会において、エンジェルスターの切花特性試験を実施している大野町のハウスを視察し、試験結果の報告および情報交換を行った。生産者も参加し、フランネルフラワー栽培について説明するとともに、県内の切花フランネルフラワーについて意見交換を行った。

出荷はまだ少量であるが、将来的には県内で産地リレーできるよう、今後も栽培支援を継続する。

担い手の育成・確保

■新規就農

認定就農者の育成・確保

Ｈ２４年度に就農開始を目指す新規就農希望者２名（いちご、露地野菜）とＨ２３年度認定就農者２名（露地野菜、いちご）の経営計画変更を支援した。今後、これらの新規就農者を継続的・重点的に支援し、技術向上と経営安定をめざし支援する。

■女性農業経営アドバイザー

揖斐地区総会・西濃ブロック総会が開催される

女性農業経営アドバイザーでは、３月７日に揖斐地区総会、１４日に西濃ブロック総会が開催されたため、それぞれ活動支援を行った。総会後には、今年度でアドバイザーを卒業する会員から「アドバイザーになったことで、多くの知恵・勇気・友達を得ることができた。感謝しています。」とお礼の言葉があった。今後も継続して会員同士の交流や情報交換が図られるよう活動支援する。

■集落営農

集落営農の事例を視察

３月９日、集落営農担い手発掘サポート事業に取り組んだ揖斐川町坂内地域集落営農組織化委員会として、郡上市を訪れた。郡上農林事務所農業普及課職員や郡上市役所職員から山菜栽培の状況や獣害対策の取り組みのほか、２３年度に集落営農を設立した経緯等について説明を受けた。

また、「猪鹿無猿柵」が設置された明宝地区の現地を訪れ、柵で囲われたラッキョウ畑が獣害を受けていない状況を視察した。

坂内地区と同じ中山間地及び降雪地帯での取り組みのため、参加した住民にとって大いに参考となった。

中濃農林事務所の普及活動状況

平成２４年３月２７日現在

今月の重点活動

■活力ある新産地づくり支援事業（円空さといも）

円空さといもの栽培状況

３月下旬になり、種芋の掘り出しが行われ、植付けを始める生産者も出てきた。今年は、降雨日が多く、ほ場が乾かないため機械が入れないところでは、作業が遅れ気味である。

【さといもの掘り出し作業】

新規栽培者を対象に植付け研修会を開催

３月 22 日に、平成 24 年度の新規栽培者と就農塾の受講生を対象に、さといもの植付け研修会を開催した。研修会には 18 名が参加し、熱心に研修を受けていた。農業普及課では、研修会の中で、種芋の選別や植付け方法についての説明を行った。

○平成 24 年産作付計画

中濃里芋生産組合　47 戸、9.0ha
　うち新規栽培者　９戸
円空さといも団地　関市　1.2ha（５戸）
　　美濃市　0.7ha（２戸）

【植え付け研修会の様子】

主要農作物の生産振興

■小麦

追肥の施用

農業普及課が、小麦の穂肥について情報提供してきたこともあり、生産者は概ね３月上旬から中旬にかけて穂肥を施用した。

また、３月上旬から葉が黄化するほ場が見られたので、サンプルを採集し、農業技術センターに病害であるかどうか検査を依頼した。縞萎縮病の恐れがあることから、発生ほ場を地図に落とし、来年度以降の作付け計画の参考にする予定である。

【小麦の生育状況】

■いちご

いちごの出荷量少なく、高単価に

先月に引き続き３月に入ってもいちごの出荷量が少なく、例年に比べ高単価となっている。そろそろ３番果房が本格的な収穫に入り、４月に入ると出荷量も増えてくる見込みである。

いちごの朝出荷は４月から

中濃いちご生産組合では、例年取り組んでいる朝出荷を、４月から始めることとしている。朝出荷したいちごは、直ちに出荷し、その日の正午には小売店に並べられるので、鮮度が非常に良く、美味しいと好評である。

■夏秋なす

平成 24 年産なすに向けた栽培研修会の開催

３月 15 日に、中濃夏秋茄子生産出荷組合の栽培研修会が開催された。農業普及課から、平成 23 年産なすの生産・販売実績を振り返りながら、適切な施肥管理、病害虫防除の実施、適期収穫による長期出荷など基本技術について説明し、平成 24 年産なすの安定生産について支援した。

また、平成 24 年産から、４名の新規組合員が生産を開始するため、重点的に巡回指導しながら、生産技術と収量の向上について支援していくこととしている。

担い手の育成・確保

■認定農業者

わが家のルールを家族経営協定書に

関市西田原の川村家では、長男の結婚を機に家族経営協定の作成に取り組み、３月15日に調印式を行った。川村さんは、「家族仲良く農業をやっていきたい」と抱負を述べられ、長男の妻は、「農業と生活とメリハリをつけたい。今後一層農業を頑張りたい」と話された。

経営主の妻は、農業委員も務められ、地域での家族経営協定の推進に向けた活躍が期待される。

【家族経営協定調印式】

■女性農業経営アドバイザー

農村女性出張講座で経営事例を紹介

３月14日に、中濃圏域の女性農業経営アドバイザーと共催で、農村女性出張講座を開催した。３名の農村女性が、経営内容や家族内での役割分担、考え方などを紹介した。

関市の神谷和子さんは、自身の病気をきっかけに酪農から肉牛に転換し、家族経営協定を活用して自由に使えるお金をつくり、さらに会計士やデイサービスを利用して、会計事務や介護の負担を軽減したことなどを報告した。地域の若い女性農業者の参加もあり、交流を深めた。

【熱心に耳を傾ける参加者たち】

地域の動き等

■武儀地区農業婦人クラブ

自慢の加工品を持ち寄り情報交換会

武儀地区農業婦人クラブ連絡協議会では、クラブ員が手がけている料理や加工品を囲んで情報交換会を開催した。

おはぎ、キウイフルーツ大福、ちらし寿司、落花生の煮物、黒からあげ、つるむらさきパン、ゆずドレッシングサラダなどがテーブルに並び、試食して評価し合った。農業普及課では、今後も地域の農産物を使った料理の伝承や商品化を支援していく。

【自慢の加工品を紹介】

■農産加工組織

加工品の試食とアンケート調査実施を支援

３月19日に、関市・美濃市の生産・加工団体が、名古屋市の金山総合駅構内で農産物及び加工品の販売を行った。ゆず加工品、仙寿菜もち、パッションフルーツジュースやお茶、黒豆おこわなどが並び、通行人が立ち止まって農業者と会話を交わしていた。里芋の入った切り餅など一部の加工品については、試食とアンケートも行い、今後の商品開発の参考にすることとしている。

【里芋餅の試食とｱﾝｹｰﾄ実施】

■小瀬採種組合

次年度の優良種子生産に向けて

3月21日に、小瀬採種組合の次年度に向けた作付会議が開催され、農業普及課から優良種子生産に向けて情報提供を行った。

平成23年度に多発した籾枯細菌病・縞葉枯病対策、雑草対策、水稲除草剤の止水期間の遵守等について説明した。また、平成23年度の栽培履歴を確認した結果、基肥や穂肥回数、土づくり肥料の施用により、種子の品質に差があったため、その結果を示し、個々の栽培について再確認してもらった。

他の種子組合に対しても情報提供を行い、平成 24 年度の収量・品質向上に反映できるよう今後も支援していく。

郡上農林事務所農業普及課の普及活動状況

平成２４年３月３０日現在

今月の重点活動

■山菜

山菜講習会

３月23、26日に大和町で山菜の講習会が開催された。

４月からの山菜販売シーズンを前に２日間で約１２０名の参加があり、販売に当たっての注意事項を確認した。

講習会は、農業普及課が講師となって、山菜収穫のポイント、山菜と間違えやすい植物との見分け方、異物混入防止方法などを説明した。

【山菜講習会】

主要農作物の生産振興

■活力ある新産地づくり支援事業（春まちにんじん）

春まちにんじん出荷本格化

春まちにんじんの出荷が本格化する中、産地では新たな取組が行われている。

生産面では、品種試験、食味や土壌病害対策を総合的に勘案して「ライム」で品種統一して産地ブランド化していくことになる見込みである。

【１ｋｇ箱入りケース】

販売面では、高級感を演出するため、１ｋｇ箱を製作し、販売開始した。また、ジュースの製造方法を見直し、新たなブランド商品として４月から販売していく見込みである。

■活力ある新産地づくり支援事業（夏秋いちご）

個別懇談会開催

ＪＡ担当者と夏秋いちご生産者を訪問し、土壌診断結果に基づく施肥設計やＨ２４年度の作付け計画、病害虫防除対策等について個別懇談会を行った。

■トマト

夏秋トマト部会総会

平成２４年３月１５日に郡上園芸特産振興会夏秋トマト部会の総会が行われた。平成２３年産のトマトは部会の目標であった販売金額１億５千万円を突破したため、出荷量５００㌧（平成２３年産は４２４㌧）という新たな目標を掲げた。また、役員定数の改正など、より柔軟な組織活動が図れるよう体制を組み替える事を決議した。

■だいこん

だいこん生産販売戦略会議

ひるがの高原だいこん生産出荷組合では年間活動計画を３月の理事会で協議した。

理事会では品種作付け計画、病害虫対策、生産販売対策を体系的に構築して市場評価を高める取り組みを全農岐阜、ＪＡめぐみのだいこん担当も交えて協議した。

観光農業を切り口にしたポスター製作、販売促進活動や６月中下旬から京阪神・中京市場へ有利販売に向け、新たな取り組みに挑戦していく計画となった。

【だいこん生産販売戦略会議】

■南天

大和町南天組合総会

２３年は南天の出来栄えもよく、出荷量は多い結果であった。大和町南天組合では、総会で２３年の出荷実績等について確認するとともに、次年度の生産に向けては、２３年の

反省点を踏まえて、消費者が使用しやすい、高品質の南天を生産し、「郡上南天」の名前に恥じないものを出荷していくことを確認した。農業普及課からは、収量減少要因のひとつとなる高温干ばつ対策について説明を行った。また、参加者は、より良い南天を生産するために、自分の経験等の情報を参加者間で共有した。

■トウモロコシ

味来生産組合

２３年度の通常総会が開催された。味来生産組合は、生でも食べられる高糖度トウモロコシ「味来」の生産を行っている。総会で農業普及課は、施肥から定植までの作業を重点的に説明するとともに、ぎふクリーン農業の農薬使用に関して正しく理解ができるように、念入りに指導をおこなった。また、参加者から積極的に意見が出され、一つ一つ回答した。

担い手の育成・確保

■家族経営協定

新たに3戸が家族経営協定を締結

ＪＡや市と連携しながら家族経営協定を推進した結果、12月～3月にかけて新たに3戸の農家が協定を締結した。各農家は、夫婦間や親子間で農家生活や農業経営について話し合い、それぞれの思いを込めた協定書を作成した。今後は、協定書に示した内容が実行できるよう家族で協力し、明るい農家生活を目指す。

■新規就農

新規就農計画検討会

新規就農計画検討会が３月６日に郡上総合庁舎で行われた。夏秋トマト経営での新規就農をめざす青年は、農業大学校を卒業後に１年間の農家研修を実施してきた。今年から、明宝地区の空きハウスを利用して就農を開始する予定である。

可茂農林事務所農業普及課の普及活動状況

平成２４年３月３０日現在

今月の重点活動

「白川町集落営農組合連絡協議会」大豆栽培研修会

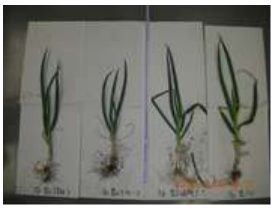
【研修会の様子（農業技術センターからの説明）】

白川町で栽培されている大豆品種の莢先熟（青立ち）対策のため、農業普及課では、品種試験等を実施し、高品質・安定生産に向けた支援をしている。２月２１日には白川町集落営農組合連絡協議会の主催により、標記研修会が開催され、ＪＡからは、本年度産大豆の生産・出荷実績、来年度産の栽培計画等について説明があった。農業普及課からは、来年度の大豆生産の方向性をはじめ、青立ちを回避する栽培管理や、品種・加工適性等に関する検証等を提案し、関係者の意識統一を図った。また、同席した農業技術センター担当者から摘心栽培技術について提案があり、関係者も関心を寄せた。

主要農作物の生産振興

■活力ある新産地づくり支援事業（青ねぎ）

トンネル被覆試験の中間調査実施



【収穫調査比較（左が農ＰＯ）】

農業普及課は、本事業を活用し加工用青ねぎのトンネル栽培について被覆資材の比較試験を行っている。５つの試験区の内、すでに二重被覆区の収穫は終了し、残り４区のうち農ＰＯ区が収穫適期となり、中間調査をおこなった。併せて実施した分解調査の結果、農ＰＯ区は花芽の退化が確認されたものの、残りの農ビ３区は花芽退化を認めなかった。こ結果は、部会の定例会で検討し、今後の栽培に活かす予定である。

■小麦

分げつ期

【小麦の生育状況】

管内の小麦生産は、美濃加茂市と富加町の３経営体が取り組んでいる。３月２０日現在、節間伸長期を迎えており、一部のほ場で湿害が認められるものの、生育は概ね順調である。また、奨励品種決定現地調査に供試中の新品種「さとのそら」「きぬあかり」は、は種の遅れた影響で生育が遅延したが、気温の上昇とともに分げつが進み、草丈も伸長している。

■茶

苗定植講習会の開催

【手もみ製茶競技会の様子】

今年度約２ha の茶園を整備した中野茶生産組合のほ場で、苗定植講習会を開催し、早期成園化に向けた茶苗の定植方法及び定植後の管理の徹底を図った。苗は、３月１７日から配布され、順次定植されている。今後は、１年目の幼木園管理の他、２～３年目のほ場の栽培管理支援も行っていく。

手もみ製茶技術競技会

今年で活動３０周年を迎える白川町手もみ保存会主催の手もみ製茶技術競技会が白川町の「茶・ちゃ・チャ」で開催された。競技会は町内外から参加の９チームで行われた。

■いちご

出荷量減少も、厳しい販売状況

３月２０日現在、２番果の出荷終盤となっており、３番果の出荷も開始されている。低温及び天候不良の影響から、急激な出荷量の増加はない。高温期を迎えるにあたり、３月１２日（紅ほっぺ）及び１５日（濃姫）に中間目揃会を開催し、着色基準を再確認した。３月１４日以降の市場休市日には、予約相対出荷を実施する。管内の３月１０日までの出荷量は前年比９１％、岐阜県産の同日までの単価は 1,259 円／kg（前年比 119%）となっ

ている。今後は、病害虫の計画的な防除と、過熟果対策（着色基準の厳守、早朝収穫、換気の実施等）を指導する。

■柿

冬季作業もほぼ終了

【冬季管理を終えた富有柿】

剪定、間伐等の冬季作業が終盤を迎えている。農業普及課では、難防除害虫であるフジコナカイガラムシに対するジノテフラン水溶剤の樹幹塗布処理の効果について、本年も山之上地域と蜂屋地域で検証を実施していく。また、処理時期や方法により、効果に影響があるとの報告があるため、塗布処理を適期に実施するよう指導していく。

担い手の育成・確保

■ＪＡ出資法人

雑草抑制ネット等視察

【視察の様子】

（有）土利夢ファーム可児は、経営面積の拡大に伴う草刈り作業の負担を軽減するため、雑草抑制ネット等の活用を検討しており、３月８日に先進地域の郡上市和良町宮地地区を視察した。

現地の農家からは、ある程度光を通す抑制ネットは、防草シートに比べて価格が２倍となるものの、耐用年数が２倍と長い点を評価をしていることや、ネット内で草が生えるため、杭が持ち上がるところもあり打ち直しが必要なことなどについて説明を受けた。

地域の動き等

■美濃加茂市

夏秋なす栽培研修会開催

【新規生産者のほ場確認】

美濃加茂市夏秋なす部会は３月９日に総会を開催し、本年度決算や次年度事業計画等を検討するとともに、ＪＡめぐみのＧＡＰに取り組むことを決定した。また、新たにＪＡめぐみの就農塾の卒業生が部会に加入し、産地力アップが期待されている。農業普及課からは、農薬使用の考え方や新しい農業技術などについて、情報提供を行った。

■可児地域

平成２４年度さといも塾が始まる

【体験実習の状況】

可児市の新たなブランド品づくりを目指して始まったさといも塾の、平成２３年産最後の講習会が３月１日に行われた。なお、平成２３年産の里芋焼酎はまもなく 850 本が販売される。

３月１５日には平成２４年第１回目の講習会を開催し、１３名の新規加入者があった。今後、里芋とそれに組み合わせる野菜の栽培について、年間１０回の講習会を開催する。野菜栽培の講義後、実習ほ場にて施肥うね立てを行った。次回の講習会は４月５日に開催予定である。

■白川町

「白川アグリネット」視察研修会

白川町内の農業のリーダー的農業者で組織される「白川アグリネット」は、会員の安定した農業経営に向け、農閑期である冬期の農産物づくりの参考にすることを目的に２月２２日に視察研修を実施した。当日は、郡上農林事務所農業普及課の協力を得て、郡上市高鷲町における高標高地帯の特徴を活かした地元農業生産法人の「春まちにんじん」の取り組みをはじめ、地元直売所における農産物販売状況等について視察・研修し、参加者の農産物づくりに対する意識が高揚した。

東濃農林事務所の普及活動状況

平成２４年３月３０日現在

今月の重点活動

■普及活動成果発表会

（地域資源を活かした地産地消研修会の開催）

【地産地消研修会の様子】

３月６日、東濃西部総合庁舎において、「地域資源を活かした地産地消研修会」を開催した。

研修会は、普及活動成果発表会と併せ、地産地消による地域振興をいかに進めていくか、参集者で考えていくことを目的とした。

最初に農業普及課から、活力ある新産地づくり支援事業で取り組んでいる「東濃ならではの販路を活かしたミニ産地づくり」について普及活動経過を報告するとともに、基本技術の励行、新技術の活用による商品化率向上や極早生から晩生までの品種活用による出荷期間の長期化、多様な農業者の参画による栽培面積の拡大等を産地づくりの課題として提示した。

また、今年６月にオープンする農産物等直売所「きなぁた瑞浪」を運営するみずなみアグリ担当者が、「プレ直売から見えたこと」と題して、昨年６月から取り組んできたプレ直売の販売体験に基づき、直売所を運営する立場からみた地産地消推進の課題やそれらを克服してきた経過等について発表された。

さらに、安全な農産物提供について農業経営課から注意喚起するとともに、三重県多気町において農家レストラン「まめや」を運営する(有)せいわの里代表が、「地産地消が生んだコミュニティビジネス」と題して講演し、「地産地消」をキーワードとした農業振興について提示した。

当日は、農産物直売所出荷者等１１５人が出席し、会場には農産加工組織等の商品や普及活動のパネル等をディスプレイした。

主要農作物の生産振興

■イチゴ

健全に推移

天候不順により収量が大きく減少したが、３月に入り、草勢は比較的良好な状態で推移している。

例年５月末～６月上旬に栽培を終了しているが、定期的な防除に努めることで、収穫期間を少しでも延長できるよう説明している。

担い手の育成・確保

■新規就農者支援

新規就農者認定地域検討会

平成２４年度就農を目指している２名の新規就農認定について、地域検討会が開催された。５ケ年の営農計画について経営確立が可能か否か、将来地域の担い手になりうるか否かなど検討を行った。

東濃地域の新規就農者への支援として、就農連携会議の充実と就農後の支援体制の強化が地域の課題となっている。

■土岐市学校給食野菜出荷反省会

地産地消が軌道に

３月２１日、学校給食へ野菜等を供給する土岐市の直売所関係者が、土岐市学校給食センターを訪問し、同給食センター職員と今年の野菜等の出荷について意見交

換する出荷反省会が開催された。
　昨年度から同市濃南地域の直売所関係者を中心に、同給食センターへの野菜等の供給が始まったが、これまで手探りで進めてきたものを一歩前進させるため、生産者が、給食センターの施設を視察し、給食センターでの野菜等の取り扱い方や野菜生産現場の状況について相互に理解を深めることを目的に、初めて開催したものである。相互に要望、改善点等を出し合い、前向きな意見交換が行われた。
土岐市では、平成２４年度は今年度の２倍相当の野菜出荷を目指している。

地域の動き等

■多治見市農産物直売所開設検討会

（農産物直売所準備会立ち上げに向け）

　平成２５年４月に、多治見駅北口に建設される福祉施設の１階スペースに６１㎡規模の直売所開設が計画されているが、具体的な内容は決まっていなかった。このため、３月２１日に、ＪＡとうと本店において、多治見市、ＪＡ、農林事務所の、設立準備会立ち上げに向けた初会合が行われた。
　農業普及課では、１年足らずの準備期間であるが、生産者と消費者が直結した多治見市ならではの直売所づくりを支援してゆく。

■きなぁた瑞浪出荷者協議会研修会(瑞浪市)

（オープンに向けた勉強会開催）

　３月２２日に、きなぁた瑞浪出荷者協議会が、食品表示制度と夏野菜生産について研修会を開催した。
　東海農政局から食品表示制度、タキイ種苗から夏野菜栽培のポイントについて説明があった。
６月のオープン時に、売場に多くの地元産農産物が並び、消費者に受け入れられる店となることに期待したい。

【研修会の様子】

■半原かぼちゃ生産計画検討会(瑞浪市)

（伝統野菜の生産がスタート）

　３月２４日に、飛騨美濃伝統野菜の半原かぼちゃ生産者と契約先である地元菓子製造業者が参加し、生産計画検討会が開催された。
　地元菓子製造業者からは、例年並みの買い入れ予定について説明があった一方、生産者からは利用拡大への要望等の発言があった。
　３月中旬から育苗が開始されており、農業普及課では、安定生産に向けた栽培管理の徹底等についての提案を行った。

恵那農林事務所の普及活動状況

平成２３年３月３０日現在

今月の重点活動

恵那地域に合う作型を推進します！　～フランネルフラワー研修会～

農業普及課では、地域特性に合ったフランネルフラワー作型の検討を進めている。

夏秋出荷の作型では、当地域の夏の冷涼な気候や、シクラメン生産に導入されている底面給水設備「Ｃ溝」を使った栽培方法に取り組む。水切れがないＣ溝での栽培は、夏季の遮光が不要になり、十分な光を当てることで、しっかりとした株を生産できる。

３月８日には、中山間農研中津川支所で現地研修会を開催し、昨年取り組んだ現地実証ほの結果検討を行うとともに、同支所で取り組んだ栽培試験結果についての説明を受けた。

当日は、生産者４戸が統一した作型で取り組むことを確認、皆で品種「フェアリーホワイト」約２万鉢分をは種した。中津川支所で１ヶ月程度管理された後、各生産者が引き取り、２回の鉢上げを経て、９月から１０月にかけて出荷される見込み。

現場で試験結果の説明を聞く出席者

主要農作物の生産振興

■活力ある新産地づくり支援事業（クリ）

超特選栗レベルのクリ　出荷量150tを目指します！

東美濃クリ産地の拡大を図るため、クリ栽培の関係機関で取り組んでいる「東美濃‘クリ地産地消（商）拡大’プロジェクト」の第６回チーム会議を開催した。

会議では、平成 19 年度に策定した「東美濃クリ地産地消（商）拡大計画」の取り組みを評価し、これから５年間の進むべき方向を定めた。

第６回チーム会議の状況

現行計画では「多くの菓子業者から求められる東美濃クリ産地に！」を目指すべき産地の姿を掲げ、平成 23 年度末に超特選栗レベルのクリの栽培面積 100ha を目標に新規参入を促してきた。栽培面積は 96ha となり、目標をほぼ達成することができた。目標を達成できた要因には、プロジェクト活動を通じクリ栽培に関係する機関が一丸となり進めてきたことがあげられる。

これからの５年間も、プロジェクト活動を通じ新規参入者の拡大を図りつつ、今までの新規参入者の出荷量確保に向けた取組を行っていくことで関係機関の合意を得、次期計画では、平成 28 年度に「ＪＡ共販による超特選栗レベルのクリの出荷量 150t」を目標に取り組んで行くこととした。

■夏秋なす

生産者増加の兆しのもとで東美濃夏秋なす生産協議会総会を開催

東美濃夏秋なす生産協議会の総会が、３月２８日にＪＡ東美濃本店で開催された。本協議会は中津川市及び恵那市のなす生産者で組織される会であり、栽培技術向上から生産者育成まで、関係機関とともに生産振興に取り組んでいる。

東美濃夏秋なす生産協議会総会の様子

農業普及課では総会に先立ち開催された代表者会議に出席し、事業計画案の作成に対して、生産者組織が主体となった仲間づくりの継続実施や、土壌病害回避や軽作業化等が期待される独立袋栽培の早期確立に向けた取り組みなどを助言した。また、組織役員について、特定の生産者に任せるのではなく、誰もが役員として組織活動に参加しながら、順に世代を引き継いでいくような組織構成とするよう誘導した。

平成２４年度は生産者が１１名、作付面積では前年比約２０％の増加となり、これは小なす生産からの移行を除くと、産地としてはこの 20 年間で初めて大幅増となる。協議会会

員である個々の生産者が勧誘した新規生産者もおり、高いモチベーションのもとで継続した産地拡大活動が期待されるところである。

■いちご

気温上昇期の出荷に先立って中間目揃い会を実施

当地域では１７戸のいちご生産者が「章姫」及び「紅ほっぺ」を中心に、１１月下旬から出荷に取り組んでいる。今後は、気温上昇の中での収穫作業となることから、３月１３日に東美濃いちご生産協議会主催による中間目揃い会が開催された。

目揃い会は、恵那市の生産者ほ場を会場に行われ、ＪＡ東美濃から消費者等のクレームが出ないよう、収穫時の着色基準を遵守することが説明された。一方、農業普及課からは、過熟果の発生防止に向けて換気や遮光等を実施することと、次作にむけた親株管理技術について講習を行った。また生産者が食味も含めて品種特性を把握する機会が設けられた。

当地域のいちごは、需要が供給を上回る状況にあり、生産者も増加する傾向にある。中間目揃い会は品質維持及び出荷量確保とともに、高品質ないちごを最後まで出荷する生産意欲の向上にもつながっており、今後もいちご産地の活性化が期待される。

着色基準や食味を確認する組合員

■大豆

現状と課題を分析し、平成24年産の単収向上に向けて～栽培反省会を開催～

３月６日、農業普及課は大豆栽培反省会を開催した。当地域の単収は県平均を下回っており、品質面でも１・２等比率が18％で３等・特定加工用が中心となっている。反省会では、出席した全ての生産者から現状と課題、栽培方針を報告してもらい、改善対策について意見交換した。土づくりや排水・雑草・獣害・連作障害対策の重要性が改めて認識され、農業普及課では来年度、モデルほ場を設置し技術確立を目指すことを提案し、生産性の向上を進めることとした。

大豆なう！栽培反省会

■飼料用稲

作期分散、省力化を目指して種籾鉄コーティング処理を実施

管内では、平成23年度から鉄コーティング直播栽培の取組みを開始し、平成24年度は３営農組合の３haで栽培する計画となっている。今年の作付に当たり、最初の作業として、３月22日に３営農組合合同で種籾のコーティング処理を実施した。

昨年に引き続き２度目の作業ということもあり効率良くコーティング作業が進み、種籾130kg分を約３時間で完了。コーティング種子を各組合に持ち帰り乾燥作業を行うこととした。

今後、農業普及課において発芽試験を行った上で播種量を決定し、５月中旬以降順次播種作業に入る予定である。

コーティング作業（後方）と乾燥の様子

■飼料用稲

平成24年度の需給調整と作付方針を決定～飼料用稲域内流通計画会議を開催～

平成24年度飼料用稲域内流通需給調整会議を、３月５日に開催した。会議では飼料用米の需給調整、取引方針の確認を行うとともに、需要者と供給者間の意見交換が行われ、畜産農家から飼料用米に期待する声も大きく、取組みを継続・拡大していくこととなった。また、関係機関から農業者戸別所得補償制度の説明、飼料用稲に関する情報提供が行われた。農業普及課からは、栽培暦の提示及び栽培に関する留意事項を説明した。

なお、平成24年度域内流通取組み予定面積は飼料用米で前年対比113％、ＷＣＳで122％となっている。

耕種農家と畜産農家が意見交換した計画会議

下呂農林事務所農業普及課の普及活動状況

平成２４年３月３０日現在

今月の重点活動

■活力ある新産地づくり支援事業「龍の瞳」

第２回下呂地域産地戦略会議の開催

２月 29 日に第２回下呂地域産地戦略会議を下呂総合庁舎で開催した。下呂地域では、「活力ある新産地づくり支援事業」として「龍の瞳」による地域づくりを目指しており、戦略会議はその企画を担う重要な組織と位置付けられている。会議には、(資)龍の瞳、市、ＪＡ担当者の戦略会議のメンバーが出席し、今年度の活動成果並びに来年度に向けた取り組みについて検討を行った。

【第２回産地戦略会議（下呂総合庁舎）】

23 年産「龍の瞳」の集荷量は昨年の 1.5 倍で、販売も順調であるが、県下各地域へ生産が広がっているため、品質のばらつきに課題を残した。24 年は、更に作付面積も増加する見込みであるため、品質のばらつきの解消を検討して行く。このため(資)龍の瞳では、人数の多い県内の地域組合を分割して、現在の 18 組合から 24 組合とし、生産者とよりきめ細やかな連携を取れる体制を整えていく。

農業普及課としては、関係機関との連携を密にとりながら下呂市内の８つの「龍の瞳生産組合」の活動支援を中心に行っていく。

主要農作物の生産振興

■水稲

下呂市における水稲苗生産の大半を担うＪＡでは、水稲苗の硬化作業を地域農家に委託している。24 年産は、下呂市北部にて８戸の農家で約４万２千枚の水稲苗を硬化委託する計画であり、硬化作業管理についての研修会が開催された。前年は低温期の播種～育苗期で、やや不揃い等であったため、農業普及課からは、育苗期（４～5 月）の気温の推移、苗の生育限界温度、温度管理上の注意事項等について説明した。

今後は、気象予報に注視するとともに、健苗づくりについて支援を行っていく。

■飼料用米

飼料用米生産者説明会開催

下呂市では、水稲生産調整の一環として飼料用米に取り組んでおり、24 年産に向けて生産者説明会が 3 月 12～15 日に萩原・小坂、馬瀬、下呂、金山地区の４地区で開催された。

23 年産は約 22ha で作付が行われ、約 100ｔが生産、うち約 50ｔが市内畜産農家に供給された。

24 年産に向けては、取り組み方針、注意事項等について協議が行われ、農業普及課からは飼料用米専用品種「夢あおば」の栽培上の注意点について説明、質疑応答を行った。今後は、安定生産に向けた技術指導を中心に活動を行っていく。

【飼料用米生産者説明会（市役所金山庁舎）】

■夏秋トマト

下呂市夏秋トマト研修会開催

益田夏秋トマト生産組合(旧北部３町村)は、3 月 22 日に下呂市萩原町のあさんず会館で下呂夏秋トマト生産組合(旧下呂町)の生産者も参加した合同研修会を開催した。

今回、中山間農業研究所の二村専門研究員を講師に迎え、育苗から定植後までの初期管理方法についてのポイントや 24 年産夏秋トマト栽培に向けて現在導入試験が行われている品種についての研究所での試験結果や品種特性に基づいた栽培管理について説明があった。

農業普及課からは、育苗期における栽培管理の具体的な注意点を説明した。

参加した生産者は、これらの内容を踏まえてながらこの春からのトマト栽培に向けて意欲を高めていた。

【益田夏秋トマト組合研修会（萩原町）】

■新規就農者

ほうれんそうの播種始まる

平成 23 年度には、下呂市内で２名の新規就農者が認定就農者として認定された。

認定農業者制度とは、新たに就農を希望する人がいつ、どこで、どのような農業を始めるといった目標やその実現のための研修や資金にいてなどについての具体的な内容を就農計画としてまとめ、この計画について県知事が認定する制度で、この制度で認定された人を「認定農業者」という。

平成 23 年度には、下呂市内で２名の認定就農者が認定され、１名は鉢花栽培を、もう１名はほうれんそう栽培を目指している。

【播種をする新規就農者（下呂市門和佐）】

今回、ほうれんそう栽培を目指している認定就農者が３月 26 日に約２ａほどの面積で最初のほうれんそうを播種し、５月上旬の初収穫を予定している。

今後、１週間おきぐらいに播種を続けながら順次収穫も続ける。

農業普及課としては、認定就農者が着実に農業経営を行えるよう継続的に支援していく。

■茶

ひだ金山茶生産組合３月栽培研修会開催

ひだ金山茶生産組合では、３月６日に栽培研修会を開催した。

農業普及課では、室内での栽培講習として現地展示ほ近くの公民館で、春整枝や整枝、防除等の栽培管理について講習を行った。

また、チャトゲコナジラミの県内での発生拡大を受け、県内発生状況や防除等の情報提供をした。

【茶園管理研修会（金山町）】

飛騨農林事務所農業普及課の普及活動状況

平成２４年３月３０日

今月の重点活動

■活力ある新産地づくり支援品目（宿儺かぼちゃ）

宿儺かぼちゃ研究会設立 10 周年！

3 月 23 日、高山グリーンホテルにて宿儺かぼちゃ研究会第 10 回通常総会が開催された。今年度は天候にも恵まれ前年を 5,000 ケース上回る 15,000 ケースとなったが、次年度は防除指針の確立により、出荷量 20,000 ケースを目指すことが承認された。

また、総会終了後には研究会設立 10 周年を記念し祝賀会が開催され、功労者への感謝状の贈呈などを行い、10 年間のあゆみを振り返った。

【感謝状贈呈の様子】

■活力ある新産地づくり支援品目（キク）

ＪＡひだ花卉出荷組合総会の開催！

3 月 21 日、ＪＡひだ本店にてＪＡひだ花卉出荷組合の総会が開催された。今年は 3 月 11 日の東日本大震災により、３～４月は販売不振が続いたが、「花の日」や「父の日」、お盆等の行事には堅調な販売となり、家族やご先祖への感謝を示す絆の証として、花は嗜好品だが生活に不可欠なものであることが再認識された年となった。

【ＪＡひだ花卉出荷組合総会（高山市）】

また、第 31 回岐阜県花き品評会にて、岩水忠盛氏の飛騨マム「ピアニッシモ」が農林水産大臣賞を受賞したこと、第 21 回花の国づくり共励会花き技術・経営コンクールにて、ＪＡひだ花き出荷組合菊部会が財団法人日本花普及センター会長賞を受賞したことを受けて表彰式が行われた。

主要農産物の生産振興

■飛騨ほうれんそう

平成 24 年度高山ほうれんそう研究班計画会議を開催！

3 月 19 日、高山市上切町のＪＡひだ高山営農センターにて高山ほうれんそう部会主催による「高山ほうれんそう研究班計画会議」が開催され、28 名の会員が出席した。

平成 24 年度の計画として、べと病抵抗性だけでなく、収量性も重視した品種を選定することに加え、飛騨ほうれんそう部会が取組を始める加工ほうれんそうの品種を試作することとなった。また、資材については、高温対策として、遮熱資材や潅水資材を重点に調査区を設置することとなった。

【研究班計画会議（高山市）】

今後は、現地における生育状況や効果確認をし、収量、品質向上に向けての技術を普及していく足がかりとする予定である。

■飛騨トマト

平成 24 年度の栽培始まる！

今月から、早い農家ではトマトの播種が始まっており、育苗センターでの苗づくりも始まった。現在の所、寒さの影響も無く、良い品質の苗ができており、順調なスタートが切れたと言える。

【播種された育苗箱】

今年は、新品種の大幅導入や、作型の見直し（後期作型への移行）など、これまでとは違う産地の動きが見られる。農業普及課としても、そうした動きに対応できるよう、新品種の栽培特性把握などに努め、昨年目標として掲げた「単収１ｔ増加」を目指していきたい。

■大麦

麦作共励会表彰式で受賞！

3 月 2 日、岐阜市の農協会館にて岐阜県米麦改良協会主催による「平成 23 年度麦作共励会表彰式」が開催された。

個人の部では飛騨地域からの出品は初めてであったが、生産者の弛まぬ努力と熱意によって『努力賞』を受賞することができた。

平成 23 年産では、単収が平成 22 年産と比較して大幅に増加したが、梅雨時期と刈り取り時期が重なったことなどにより品質が低下した。

平成 24 年産に向けては、関係機関と連携し品質の向上を図るための支援を行っていく。

【表彰される生産者（岐阜市）】

担い手の育成・確保

■女性農業経営アドバイザー

飛騨ブロック総会の開催！

3 月 16 日、ＪＡひだ本店にて女性農業経営アドバイザー飛騨ブロック総会が開催された。

食育活動で酪農について説明されるなど活躍された山下ひとみさんが任期満了に伴い退会され、新たに高山市で養豚をされている吉野聡子さんが仲間になった。

平成 24 年度は県の本部事務局を飛騨ブロックが担当し、県全体の視察を開催することから、総会の後に県下より集まるアドバイザーの方々を歓迎すべく協議を行った。

【飛騨ブロック総会（高山市）】

■指導農業士

指導農業士飛騨支部総会の開催！

3 月 26 日、ひだホテルプラザにて指導農業士会飛騨支部の第 35 回通常総会が開催され、21 名中 20 名が夫婦で出席した。

今回の総会では、役員改選の年で新役員が選出され、新たな執行部で担い手の育成をめざすことになった。

【新役員あいさつ(高山市)】

地域の動き等

■高山市冬頭町

「飛騨の農業」第６回編集会議を開催！

3 月 15 日、ＪＡひだ本店にて飛騨農業振興会主催による「飛騨の農業」編集会議が開催され、市村、ＪＡ、農林事務所の関係者８名が出席した。

この「飛騨の農業」は飛騨管内（含む下呂市）の小学校４年生を対象とした副読本で、毎年発行し、各小学校に配布されている。

今回は、新作物、環境保全、食育などの内容を大幅に見直し、小学生にもわかるように、用語、漢字に気をつけながら編集を行った。「飛騨の農業」は 3 月末に印刷され、4 月初めには各小学校へ配布される予定である。

【文書校正する関係者】

県内の産地の動きと専門普及指導員活動状況

農業経営課技術支援担当
平成 24 年 3 月 30 日現在

1　専門普及指導員としての活動、指導内容（対策、支援等）

（１）効率的･効果的な普及活動の支援

◆ブロコッリー栽培検討会を開催

３月１日、ブロコッリー栽培検討会を開催した。近年、岐阜や西濃地域を中心に秋冬どりのブロッコリー栽培を推進しており、県の「活力ある新産地づくり支援事業」も活用して更なる産地拡大を目指している。しかし、１２月下旬から１月にかけての厳寒期の出荷量の極端な減少や品質低下が大きな課題となっている。そこで、関係する農業普及課と農業技術センター並びにＪＡ全農岐阜による標記検討会を開催し、今年度の生産・販売の現状と課題について情報共有するとともに、次年度への具体的な対策を検討した。

今後は、次年度の生産計画の作成や現地実証への取り組み支援などについて一層の連携を深めていくこととしている。

（野菜担当:加藤　高伸）

（２）試験研究等で開発した先進的技術の現地への実証･普及

◆トマト独立ポット耕栽培検討会を開催

３月１３日、トマト独立ポット耕栽培検討会を開催した。トマト独立ポット耕栽培は、県農業技術センターで開発されたオリジナル栽培技術である。特徴として、培地が他の栽培方法と比較して極端に少ないことがあげられる。そのため、養水分管理が極めて重要となっている。

そこで、関係する普及指導員を招集して、気温上昇等により養水分吸収量が急激に増加する今後の栽培管理等について農業技術センターの担当研究員から指導を得るとともに、生産者への指導事項等について検討した。

（野菜担当:加藤　高伸）

（３）普及指導員等の資質向上

◆ハウス環境制御に係る検討会を開催

３月１９日、ハウス環境制御にかかる検討会を開催した。最近、施設園芸ハウス内の栽培環境（温度・湿度・炭酸ガス・光など）を積極的に制御することにより、更なる高収量を目指す研究開発等が盛んに行われている。また、生産農家間でも炭酸ガスの測定機器等を導入するなど関心が高まっている。このような状況を踏まえ、最新の研究情報や技術等について研修を行うため、（独）農研機構・野菜茶業研究所のつくば研究拠点にて、野菜工場の栽培環境制御に係る研究開発に取り組んでいる研究員を招へいし検討会を開催した。

講演では、正確なハウス環境のデータ収集に係る注意事項やデータ解析及び制御に係る基本事項などについて習得することができ、研究の推進や指導力の向上を図ることができた。

（野菜担当:加藤　高伸）

（４）県下の技術の統一

◆花き生産指導検討会を開催

３月１３日、県育成花き生産指導上の技術統一を図るため、各農業普及課の花き担当者及び農業技術センター、農産園芸課の担当者による検討会議を開催した。

今回は現地検討として大野町内の切り花フランネルフラワー生産温室に設置している冬～春出荷作型の現地試験圃にて、成果検討を行った。

また、室内検討ではフランネルフラワーの他、カレンジュラ「かれん」及び今年から現地で本格的に試作が始まるサルビア・フェニックスシリーズについて、技術統一を図った。

切り花フランネルフラワーの現地検討

（花き担当：井戸 誠二）

◆「キュウリ黄化えそ病」対策チーム会議の開催

３月８日、海津地域のキュウリで多発している「黄化えそ病」について、関係機関でつくる対策チームの検討会議を開催した。会議では、分担して実施した調査、研究の報告と意見交換を行い、対策技術等の円滑な普及方法についての協議を行った。今後、得られた成果について生産者に理解しやすい形で取りまとめ、６月に開催される研修会で報告する予定である。

協同現地調査の様子

（野菜担当：加藤 高伸、病害虫担当：鈴木 俊郎）